

## 詩篇27篇4-6節 「主の家に住もう」

### 1A 主の家

1B 親しく交わる所

2B 主の麗しさ

### 2A 一つのこと

1B 願うこと

2B 求めること

3B 全て

4B 加えて与えられる

### 3A 高く上げられる方

## 本文

詩篇 27 篇を開いてください、今朝の箇所は 27 篇 4-6 節です。午後礼拝にて、25 篇から 29 篇までを読んでみたいと思います。私たちは前回、「主は私の羊飼い」という題名で、主が私たちを個人的に養い、守り、導き、そして私たちを豊かに祝福してくださる方であることを学びました。敵が自分の目の前にいる時にさえ、最高の客としておもてなしをしてくださる主人のように、私たちの頭に油を注いでくださり、私たちの持っている杯は溢れているようにして下さいます。

そして 23 章の最後で、ダビデは死後に至るまでの願いを述べました。「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」ダビデは、主が自分をこのように恵んでくださるところ、主が愛してやまず、自分に聖霊を注いでくださるところに、いつまでも、永久まで住みたいという思いを言い表しました。

### 1A 主の家

私たちが先ほど、交読文で読んだところに同じ願いをダビデは言い表しています。4 節を見てください。「4 私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」

ダビデは、23 篇においてはこれからずっと、永遠にまで主と共に住みたいという思いを言い表していますが、ここ 25 篇では少し背景が違います。彼は、敵が自分を襲いかかっている時にこの思いを言い表しているのです。彼は今、おそらくはサウルから逃げている時に、物理的にエルサレムにある神の箱のことを思いながら、その天幕を思いながら、この願いを言い表しています。天の中に引き上げられてもいつまでも主にいたいという思いがある一方で、ダビデは生活のど真ん中で、激しい戦いがある時にもしがみついても、神の家に戻りたいという激しい感情を言い表しているのです。ほとんど、とりつかれているのではないかと思われる程の激しい思いです。

## 1B 親しく交わる所

その証拠に、彼は言葉を掻き集めるようにして、自分の知っているありったけの言葉で、主の家のことを表現しています。「主の家」という言葉だけでなく、「その宮で、思いにふける」と言っています。ダビデの時代、まだソロモンの建てる神殿は存在していません。しかし主はダビデに、その幻を与えておられたのではないかと思います。その栄光に輝く宮を思い描いていました。そしてその宮は、後にメシヤが王として着座される栄光に輝く宮の幻も含むかもしれません。それから、5節では「悩みの日に私を隠れ場に隠し」と言っています。隠れ場とは、仮小屋のようなものです。けれども、主がおられる仮の住まいにいたいと言っています。さらに、「幕屋」と言っています。これは、モーセの幕屋のことです。

つまりダビデのこの熱情は、私たち信者の地上における集まりに匹敵します。この世に生きていて、まだ主が戻ってこられていない、地上での残された日々を送る中で、あらゆる試練や困難、生活の浮き沈みがあります。あるいは何も起こっていない、日々何も変わっていないような時期を過ごされているかもしれません。けれども、「私は何としても、主を礼拝したいのだ。」という強い願望ということです。イエス様がよみがえられ、天に昇られてから、主は聖霊を私たちに遣わしてくださいました。そして教会が誕生しました。使徒たちは、大胆にこの私たちこそが、神の宮なのだと宣言しました。「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。(1コリント3:16)」ですから、天に引き上げられるまでは、この地上において信者の集まる教会において、同じ情熱を抱くのです。

## 2B 主の麗しさ

ダビデは、「主の麗しさを仰ぎ見」るためにと言いました。これが、主の家に住みたいと願った目的の一つです。主がいかに優れたお方なのか、その栄光の美を見たいと強く願いました。モーセが幕屋を建てた時に、栄光の雲が幕屋を満たしました。「モーセは会見の天幕にはいることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が宮に満ちていたからである。(出エジプト 40:35)」ソロモンの建てた神殿においても、祭司が宮の中に入ることができませんでした。神の栄光による濃い雲が満ちていたからです。

入ることのできなかつた、ということは、そこに何一つ、人の関わる余地がないことを示しています。神ご自身の姿、そして神の行なわれていることがあがめられているのであって、人の行為が何一つない姿であります。キリストご自身が神の住まいとなってください、イエスご自身に神の栄光の輝きが完全に現れるようにしてくださいました。「ことば(キリスト)は人となって、私たちの間に住まわれた(幕屋を張られた)。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。(ヨハネ 1:14)」

そして、「思いにふける、そのために。」とダビデは言っています。口語訳ですと、「尋ねきわめる」と訳されています。主の麗しさについて、あなたのその姿を見たいですと尋ねている姿であります。

モーセがシナイ山の上で、この要望を主に申し上げたことがありました。神はモーセと顔と顔を合わせるように、親しい友のようにして話してくださいましたが、モーセがこれまで言えなかったこと、大胆な願いをしたのです。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。(出エジプト 33:18)」モーセの尋ね求めをすべて聞いてくださった主ですが、さすがにこれだけは全て叶えてあげられませんでした。なぜなら、主ご自身の栄光の全てを見てしまえば、人はたちまち死んでしまうからです。主は聖いお方だからです。そこで主は、ご自身が通りすぎて、その後ろ姿を見せることを約束してくださいました。

そうしたら、主は通り過ぎられる時に、ご自分の名前を宣言されました。「34:6-7 主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」なんという美しい名前でしょうか。憐れみ深く、情け深い神。怒るに遅い方。恵みと真実に富んでいて、その恵みは千代までも保たれます。咎とそむきと罪は赦されます。罰すべき者は罰せられますが、それも束の間、三代、四代は千代に比べたらごくわずかの間です。これが宮で主を尋ねきわめることです。主のすばらしさ、その麗しさを尋ねて、そして見せていただくことです。

ところでダビデは、祭司でもレビ人でもありませんでした。祭司やレビ人は主の宮そのものが相続であり、そこで絶えず奉仕していました。けれどもダビデは、そうではありません。彼には務めがありました。彼は戦士でありました。日々、訴えを聞いてもらうために王のところに民がやって来ていました。そして、彼は神から賜物が与えられていました。まさに、この詩篇が彼の賜物の一つを示しています。彼は詩人であり、音楽に長けていた人です。少年の時から立琴を奏でており、そしてこのように、とても細かい感情を歌詞の中で言い表すことのできる人でした。しかし、彼はそこに興奮を覚えませんでした。最高の興奮は、主の宮にいて、恋人を眺めるように主を眺めていることだったのです。

実に人としてのイエス様も、このような生活を崩しませんでした。宣教の働きをして、群衆がイエス様に押し寄せ、その教えを聞きにきていました。病人を直し、悪霊を追い出されていました。肉の家族である母や兄弟たちは、イエスがおかしくなったのではないかと心配して、やってきた程でした。そのような休みの取れない働きの中におられた時に、それでも主はひとり退かれて、父なる神に祈られていたのです。自分の働きは、父なる神の家におられることだと、少年イエスは母マリヤと父ヨセフに話しました。

主の宮なしでも、主から与えられた残りのもので生きることが可能です。ここが人を騙します。表面的には、物事は順調に進んでいます。クリスチャンとしての生活も、特に問題が感じられません。けれども、大丈夫だと思っていたところが、いつの間にか心が乾いてしまっていたということが起こるのです。

## 2A 一つのこと

そこで注目していただきたい言葉が、4節の初めです。「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。」ダビデは「一つのこと」と言いました。生活の中でいろいろなことが起こっているけれども、たった一つのことを願って、それが主の家に住まうことだと言いました。この「一つのこと」が何を意味するか、考えてみたいと思います。

### 1B 願うこと

第一に、「自分が進んで願っていること」であります。「願っている」という言葉には、誰に言われるまでもなく、自ら進んでという主体性があります。誰にも強制されず、自分がそれを望んでいるということです。恋人が、周囲の反対を押し切ってどこかで会うのと同じように、ただこのことだけを求めている、ということでもあります。主を礼拝するというのは、とても私的なことです。神と自分との秘め事です。もちろん、私たちはこのように集まって、誰がここにいるか認めることができますが、心の中で起こっていることは秘め事です。主にお会いしたいという思慕は、自分と神との間のことです。

ダビデが罪を犯してしまって、何を最も悲しんだのでしょうか。彼はバテ・シェバと姦淫の罪を犯し、その後で夫ウリヤを殺す罪を犯しました。何を最も悲しんだのか？「主との交わり」でした。詩篇51篇では、「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し」ましたと言いました(4節)。そして、「あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。(12節)」と祈っています。他の人の前での面子ではなく、ただ主との交わりが断たれたことで悲しんでいます。

### 2B 求めること

ダビデの言った「一つのこと」の第二の意味は、「優先順位」です。他の事柄も大事だが、それを退けてでも主の家で住まうことを選び取る、ということです。「私はそれを求めている」と彼は言っています。求めるとは、優先して選び取るということです。

ダビデは、詩篇 86 篇 11 節ですが、「私の心を一つにしてください。」と祈りました。他にもしなければいけないことがあります。それ自体は何ら悪いことではありません。いや、良いことですらあります。けれども、人は二つのものに仕えることはできません。「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。(マタイ 6:24)」人はいろいろなことを同時にできると思ってしまいます。けれども、毅然とした決断、これを絶対に優先するという深い決意、明け渡し、あるいは献身がなければ、それを選び取ることはできません。

イエス様は他のところでも、たくさんこのことを語られました。「恐れる」という言葉が使われました。神を恐れるのか、それとも人を恐れてしまうのか？そして、「捨てる」という言葉が使われました。「自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについてきなさい。」という言葉です。これ

は、主に明け渡す、ゆだねると言ってもよいでしょう。さらに、「憎む」という言葉さえ使われました。「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。(ルカ 14:26)」これは感情の憎しみではありません。ものすごく強い、選択の行為です。主との結びつきを持つために、これを優先させるため、その次に家族や夫婦の関係が来るようにするためにする行為です。家族や夫婦、子どもとの関係があまりにも強いので、「憎む」という言葉によって表現しています。

### 3B 全て

そしてダビデの言った「一つのこと」の第三の意味は、「すべて」であります。主の家に住まうことが、私のすべてです。これ一つですということです。もし、このことがなければ私にとって全ての関わりを失うこととなります。使徒パウロが言いました。「キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。(コロサイ 3:11)」

ある牧師さんから興味深い話を聞きました。彼の家に、モルモン教の宣教師が訪問してきました。そして玄関で彼らの話を聞いていましたが、イエスのことになりました。「イエスは良い人です。」と彼らは言ったのです。そこでその牧師が言いました。「イエスは良い人ではないでしょう。イエスは全てです。キリストは私にとって全てですよ。」自分はキリストを外したら、何一つ残らない、ということです。キリストから離れて自分が何になる？という思いです。

多くの人は、自分が少し整えられているから、教会で礼拝ができと思っています。問題が起こると、その問題を解決するために行動に移して、それが解決されたら礼拝に行こうとします。しかし、それは問題という泥沼に自らを入れていくようなものです。問題から出るためには、むしろ解決させようとするのではなく、問題をそのまま持ったまま主の前に出て行くのです。

ある説教で、問題を解決してから礼拝に行こうとする人について、山で道に迷った時と似ているという話が出ていました。迷った時に、最悪の行動パターンは意外にも沢を下っていくことだそうです。沢のところは樹木が生い茂っていませんから歩きやすく、下に向かってるので、「このまま山麓まで行けるのではないかと錯覚してしまうそうです。ところが、崖や滝に突き当たって進退窮まるのが沢だということ。それを無理やり下ると、転落してしまいます。どんなに歩きやすくても、絶対に沢は下っていかないことだということです。

逆に奨励したいのが、ピークや尾根に上がることです。道に迷って精神的にも体力的にも余裕がない状態では、上へ向かって登り返していくのは大変億劫に感じられるはずですが、それでも登っていくべきとのこと。なぜなら、ピークや尾根に上がれば視界が開け、地図とコンパスでの現在の確認が容易になるうえ、登山道はピークや尾根を通っていることが多いからだ。つまり、困難がある時に目の前にある解決方法を求めると、沢を下っていくようなものです。その反対に、億劫に感じられるけれども主を礼拝することによって、視界が開けます。主が自分を高く引き上げて

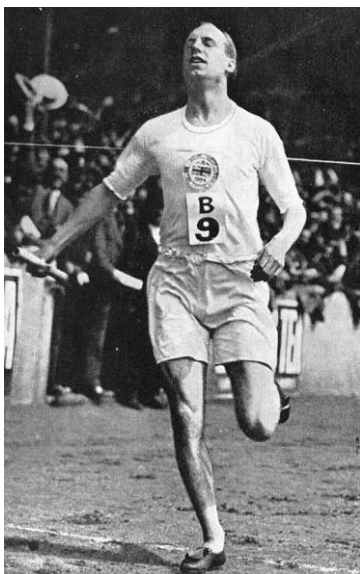


くださいます。

#### 4B 加えて与えられる

ダビデの「一つのこと」と言った、第四の意味は、「他のことは加えて与えられる」ということです。イエス様が言われた約束です。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。(マタイ 6:33)」主の家に住まいさえすれば、その他の事柄は正しい位置を占めて、機能していきます。一つのことを求めると、他のものを失うと私たちは考えますが、むしろ一つのことを求めると、他のものがきちんと付いてきます。

優先順位について、私が教えられた最初の人、映画の中の実在の人物でした。「炎のランナー(Chariots of Fire)」の主人公、エリック・リデル(Eric Liddell)です。私が大学一年生の時に、教会に通ってみとうと思った時に、伝道を目的にした家庭集会で、この映画のビデオを見せられました。彼は、スコットランドの陸上選手で、1924年のパリ・オリンピックで金メダルを獲得し、英国で最も早い男として有名になりました。けれども、それは金メダルの獲得で有名になったのではなく、日曜日に走らなかったことで有名になりました。



彼は百メートル、二百メートル走を専門としていましたが、400メートル走に出る計画はありませんでした。けれども百メートル走の予選が日曜日に行われることを知った彼は、断念して代わりに別の曜日に走られる400メートル走に出ることになったのです。日曜日は教会で礼拝を守ると彼は強く決めていたのです。彼はオリンピック委員会からだけでなく、要人や皇太子からも出場するように命じられていたのですが、国家のためよりも、神の栄光のために走ることに決めていたのです。残る数か月で、400メートル走のための猛練習を始めました。誰も金メダルは予測していませんでした。しかも、一番外側のコースを走るという不利な条件だったのです。ところが、予想に反して、彼は世界新記録を出して金メダルを獲得したのです。

実は、私はこの映画を見た時はまだクリスチャンではありませんでした。けれども、見せられて不快になりました。こんなつまずかせるような映画を見せたら、クリスチャンになろうとしないではないか？と思ったのです！ところが、その二・三か月後、信仰を私が持ち、それ以来、日曜日の礼拝を休んだのは、五本指で数えるぐらいしかないのではないのでしょうか。全く不思議です。

#### 3A 高く上げられる方

ここで、礼拝を厳守すれば金メダルが付いてくる、という安価な話をしたいのではありません。映画「炎のランナー」には出てこない、もっと栄光の富んだエリックの生涯があります。彼は次のオリンピックに出場するのをやめ、宣教師になることを選びました。彼は元々、中国で働いていた宣教

師の間に生まれていました。中国で福音を、神の愛を伝えることに一生を捧げることに決めました。

彼は中国で、カナダ人の妻を迎えて、三人の娘も授かりました。ところが、1931年に満州事変が勃発して、外国人にとって危険な場所となりました。彼は妻と娘をカナダに帰国させ、自分だけ中国に残りました。その後、1943年、日本軍によって山東省の収容所に抑留され、1945年、終戦間近に脳腫瘍を患って43歳の若さで天に召されました。彼は釈放される可能性が一度あったそうですが、妊婦が収容所内にいるのを知って、自分の代わりにその女性を釈放させたのです。

ここまで聞けば、「なんだよ、結局、主の家を大切にすっていても、悪いことが起こるんじゃないか。」と思われるかもしれません。いいえ、彼の収容所での働きがものすごい栄光に富んだものだったのです。彼は戦争で離ればなれになった子供たちと若者に聖書の話聞かせて、友となり、父親のようになりました。そしてその時、聖書にある「あなたの敵を愛しなさい。」というイエス様への命令が議論にあがりました。そこには日本兵がいます。この命令は現実的なのか、単なる理想論に過ぎないのか議論したのです。中国人に対する仕打ちは残酷だったので、日本人に対する憎しみや憤りを募らせていたのです。

けれどもエリックは言いました。「聖書には、迫害する者のために祈りなさい、とある。僕たちは愛する者のためなら、頼まれなくても時間を費やして祈るが、イエスは、愛することのできないような者たちのために祈れと言われた。だから、君たちも日本人のために祈ってごらん。…神が愛している人を、憎んではいけない。祈りは、君たちの姿勢を変えるんだ。」その時に、当時高校生だった、スティーブン・メティカフという人もいました。彼は反感を抱いていましたが、祈ってみたのです。

エリック自身も毎朝、15分早めに起きて、日本の国のためと日本人のために祈ったので彼も模範にして祈っていました。祈っても祈っても、日本兵の振る舞いは変わりませんでした。メカティフの心が変わっていったのです。憎しみを感じなくなっただけでなく、「戦争によって命の価値が分からなくなってしまったのだ、人間が神に造られた価値ある存在だということを知らないから、あのようになってしまうのだ。」と思えるようになってきたのです。エリックが天に召され、メティカフが棺を担いで、「もし生きてこの収容所を出られる時が来たら、僕は宣教師になって日本に行きま

す。」  
そしてこれが、現実のものとなったのです！彼は、終戦後38年間、1990年まで東北や北海道で福音を伝えたのです。私はこの話を聞いた時に鳥肌が立ちました。主の家に住まうことを、ただ一つのこととして願い求めたエリックの、彼の脳腫瘍によって収容所で死ぬという姿は、まさにオリンピックの金メダルをはるかに超える、栄光に輝いた姿なのです。考えられますか、私たち



日本人への祈りが虐げる日本兵のための祈りから始まっているのです。平穏な時でさえ、遠くに  
いる外国人が日本のために祈ってもらうことは稀です。けれども、日本兵の虐げを用いて、キリス  
トは働かれたのです。そして、もしかしたら私たち自身が、中国の山東省の収容所での祈りの結  
実かもしれません。私は仙台出身で、仙台で初めて教会に行きましたが、メティカフの宣教の働き  
が間接的にでも及んでいたかもしれません。私たちの主イエス・キリストは、まさに敵の虐げの中  
から、かぐわしい香りを放つ花のように咲き乱れるのです。これを荣誉と栄光と言わずして、なんと  
呼べばよいでしょうか！

そこでダビデの 27 篇における祈りの続きを読みましょう。「5 それは、主が、悩みの日に私  
を隠れ場に隠し、その幕屋のひそかな所に私をかくまい、岩の上に私を上げてくださるからだ。6  
今、私のかしらは、私を取り囲む敵の上に高く上げられる。私は、その幕屋で、喜びのいけにえを  
ささげ、歌うたい、主に、ほめ歌を歌おう。」まさに、エリックの証しのとおりですね。悩みの日に祈  
ることによって隠れ場に入りました。そして彼は敵よりも上に引き上げられました。彼の魂は、その  
幕屋で喜びのいけにえを捧げ、ほめ歌をうたっています。

ただ一つのことを願いましょう。主と共にいること、主の愛に満たされること、これに献身し、明け  
渡し、魂を注ぎ出すような人生を送ってみましょう。このことを自分の最も激しい情熱となりますよ  
うに。自分を決して、目で見えるような環境で評価しませんように。自分の働きなど、とても小さい  
ことだと卑下しませんように。捧げられた魂、明け渡された魂は、神にとって最もかぐわしい香りな  
のです。